

彼らは生きてゐる矢として送り出される

森田宗一

“人間は、その発達の過程において、人類の歴史を圧縮したかたちでひととおり体験するものだ。母の胎内を出てから、時折大きな起伏をもつて母から離れ、成長し、歴史のたて糸を自ら織りなして行かねばならない……。”これは発達心理学の権威アーノルド・ゲゼル博士の学説の根底をなす考え方である。

たしかに、子供は一歳頃ようやく二本の足で立ち手を使う頃から、三歳、六歳、十三、四歳、そして十七、八歳の大きな成長期の峠を経て、母なる大地から分離し、親のもとを旅立って行く。そういう峠路にはことさら母子には“別れのつらさ”というべきものがある。それを成長の喜びとしようかとめ、見守りつつ子供の成長（旅立ち）を見送り、手もとから放してやるかどうか、聡明な母親の心がまえでなくてはな

らない。この頃は、子離れしない親、母離れしない子供が多く、成人になっていろいろ問題をおこす原因となっている例が多い。

“ふるさととは遠きにありて思うもの”。母はふるさとである。親から放たれ送られ、母というふるさとを離れることは、人間としての新しい出会いの始まりなのである。親子の幅のある人生の友としてのつき合ひも、それでこそ豊かに成長する。その人間成長の道理（ことわり）が、今日あまりに忘れられているように思われる。幼少時における母子の濃密な肌ふれ合う愛情関係が大切なことは、いうまでもないが、子供の発達における母子分離（セパレーション）、親の側からいえば、“放つ、送る”ということこそ、親と子のそれぞれの豊かな成長の鍵であると知らねばならない。

この頃の未成熟な中高生の非行、ママとボク手を結び合
い父を無視”などという母子ベッタリを思わせる川柳。その
はては大学入試にも卒業式にも母がつきそい、やがて結婚し
た息子の新婚旅行にまで母親がついて行くという風潮は驚く
べきものである。最近の離婚の事件にも、そうした理由から
申立てられる男性の例が少なくない。高校生の家庭内暴力の
ケースなどにおいても、幼少の頃から母子の分離がなく、父
親との芯のあるつき合いの稀薄な者が非常に多いようだ。

私事で恐縮だが、五人の子供のうち末から二番目の娘が最
近、アメリカの大学院に学ぶうちあちらの青年と結婚した。

その結婚式に参加しているのを知った。娘は数年前ま
え児童文学修業のためメキシコに向い、メヒコに二年、その
後アメリカ・カルフォルニア州に定住。アメリカ人は勿論、
インディアンの人々その解放運動や平和運動に参加している
日本の尼僧の方々などと親しくなり、そういう生活の中で日
本やアジアに深い愛情を持つアメリカ青年と相識り結ばれる
ことになった。

メキシコへ発つ娘の行手浄むがに

今宵淡雪しみじみと降る

これは彼女が日本を離れる時、送別の夜、不安と祈りの気
持でつくった私の歌である。しかし私の思いをはるかに越え
たところに娘は巣立ち成長しているのを知った。その娘を通
じて未知の世界・未見の人々を知り多くのことを学んだの
は、父である私であった。

「放つ、送る」という言葉とともに、私が今深く思うのは、
「あなたの子どもは明日の家に生きている」というレバノン
の詩人カーリル・ゴブランの詩である。

彼らは人生の希望そのものの息子娘である。

彼らはあなたを通じて来るが、あなたから

来るのではない。あなたとともにいても、

あなたに所属していない……

彼らの魂は、明日の家に住んでいる。

あなたは、彼らをひきとめておいてはいけな

い。なぜなら、人生はあともどりせず、昨日の

ところにとどまってもいないから。

あなたは弓で、あなたの子供は、それから生きている

矢として送り出される。

(東京家政大学・元家裁判事)